

音楽美にひたる心



五十嵐 ヨシミ

今年も暑い夏がやってきた。

『音楽の基礎能力を高める指導』という主題で行われた中教研音楽部会の席で、指導助言の先生から音楽の基礎についての説明をおききしているうちにひどく心うたれた言葉があった。

「基礎とは音楽美にひたる心である。

音楽美とは、作曲者が訴えたいものを音楽の要素を使って表現したものであるから、その心は聴く人の出会いによって違ってくる。即ち、一人一人が感覚の陶やにおいて、知識、技能の面での位深まりを持つているかということ、そして更にたいせつなことは、人間としてどのくらい高まっているかということである。」と。

私はこの話をきいているうちに、私たちが生徒とともに求めてきたもの、

かわい協力者があった。声が出ない三年生の指導に手をやいている時、卒業した先輩が来て歌の輪に入って声をきかせてくれた。あとで聞くとも部長が電話で連絡しておいたか。

男の生徒が休むとリーダー格の生徒が電話で呼びつけて集めてくれた。

「腹筋」をさぼっている男生徒の足をひっぱって指導していた部長の姿。腹式呼吸の方法のみこめない一年生に手とからだで教えている三年生。それは、文字どおり私の手足になって動いている生徒の姿なのである。

入部したばかりのころはヨチヨチ、オドオド。先輩の言うとおりにしかできなかった一年生も、二年生になるとからだもガツツリ、発声もしつかりしてきて、目標もちゃんと持つようになる。

「歌が好きで入った」が、「趣味や特技としての音楽にみがきをかけた」などと生意気な表現までするようになる。更にそれが三年生になると、態度にも発声にも落ち着きとみがきがかかり最後の年という心情からか、「コンクールでは是非入賞したい」という言葉が必ず出るようになってくる。

私はこの変化というか、変容のしかたをみつめながら夏休みを迎えるのである。

夏休みに入ると中体連から解放された男の生徒が入部してくる。十名程度であるが、まず音楽の好きな生徒たちである。

厳しい運動クラブの練習を経験してきた者ばかりであるが、それ以上の厳しい腹筋や発声練習にまず音をあげる。そして必ずといっていいくらい、一人か二人の落後者が出る。私はそれでも知らんふり。そのうちお互いに励まし合いながら、いつの間にかまたメンバーがそろろう。

そんなことのくりかえしをしているうちに、いつか全員の心が不思議とびつたり一つになる時がくるのである。それは、むずかしい曲を八分どおり歌いあげたころだろうか。夏休みも終わりに近づくころであろうか。

うたって、うたって、腹の底から声を、心をふりしぼって、ファイナルをうたいあげる時、なんとも言えない音楽美に感動するのである。

部長が高らかに掲げた目標の三つ。

- 一、楽しく充実したクラブにするために、自主的に参加する。
- 二、心を合わせ、技を磨き合う。
- 三、県大会に出場し、入賞する。

この中に、子供らの願いと姿があるのだと思う。そして、厳しい練習の中から育くまれる協調の真のよこぎに、また美しいハーモニーの中に、私は音楽美にひたる心を見たとような気がするのである。

(喜多方市立第二中学校教諭)